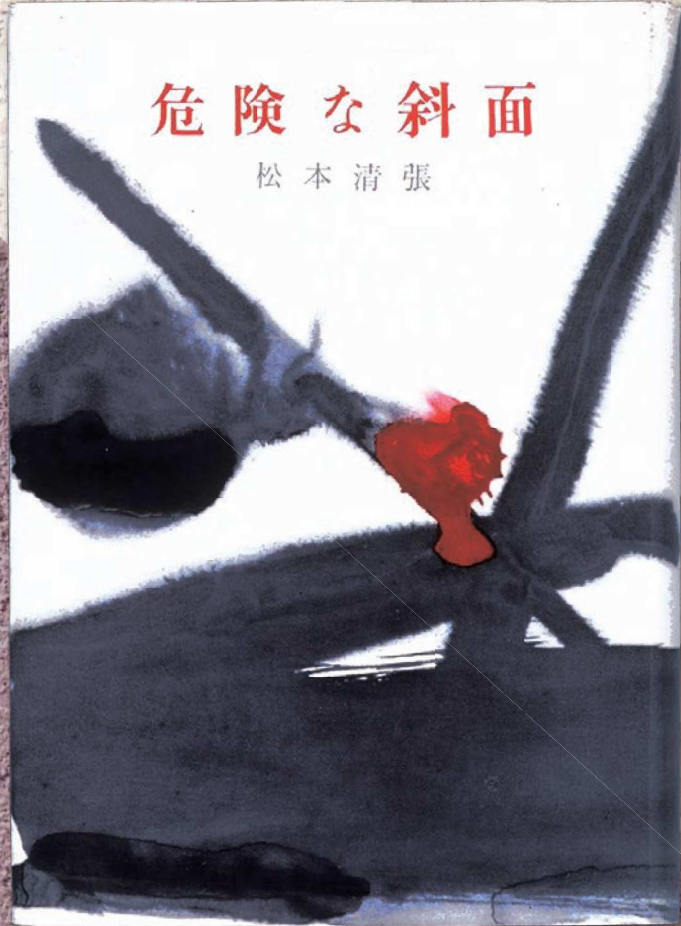


松本清張記念館

◆館報◆

2017.12
第56号

秋場文作は、
亡霊から通信を受け取っている
思いをしているに違いなかった。



「危険な斜面」昭和34（1959）年 東京創元社

「危険な斜面」は、昭和34（1959）年
「オール讀物」二月号に掲載された。

現在入手できる本：「危険な斜面」文春文庫

目次

松本清張記念館開館19周年記念講演会	2
開館20周年記念プロジェクト	2
「開館20年の軌跡展〜終わりになき探求〜」	4
20周年企画 あふれる想いを	5
清張オマージュ作品募集	5
展示品紹介	6
点描 作品の舞台を訪ねて	6
イベントのおしらせ	7
友の会活動報告	7
トピックス	8

作品紹介

秋場文作は、歌舞伎座のロビーで、野間利江と十年ぶりに再会した。驚いたことに彼女は、秋場が勤務する西島電機株式会社の会長・西島卓平の愛人となっていた。

かつて交渉のあった二人は、この出会いを機に、再び深い仲になる。男にのめり込む利江に対し、秋場のほうは女を出世に利用しようと考えていた。やがて秋場は、会長への発覚を恐れ、入念な計画のもと女を退けるが――

思いがけない第三者の登場により、秋場のアリバイは破綻する。

東京発、博多行急行《筑紫》に乗って出張した秋場は、羽田発、大阪経由で小倉に降り立っていたのではないかと男女の愛憎劇を、トラベルミステリーで描いた秀作。作品の舞台に、清張のふるさとである小倉、下関が登場する。

（学芸員 柳原暁子）

「ハッピーエンドの時代」

講師 赤川次郎 (作家)

男女共同参画センター・ムーブ
参加者約四〇〇名



最近のミステリー作品に感じること

私が二十八歳で新人賞を受賞してから早くも四十一年が経ち、もうすぐ七十歳になります。怒涛のように迫ってくる締め切りと戦っていた三・四十歳代の頃には、この歳になるまで小説を書き続けているとは思ってもみませんでした。

デビュー以降、オリジナルで約六百冊の本を書いてきましたが、私の書く小説はきれいなことと終わっていることよく言われます。つまり、どんなに悪人は登場せず、悪役でも本当の悪事ではできないような人間だということです。かつて私が愛読していたアガサ・クリステイヤーやエラリー・クイーンといった古典的な名作でも、理由もなく多くの人を殺すような犯人は登場し

ません。怒りをずっと溜めていたりとか、憎しみが殺意に変わったといった、二心の動機がちゃんとありました。

しかし最近のミステリーの世界では、無差別大量殺人を起こす人間が出てくる話が流行しています。ある文学賞の選考委員を務めた際、最終候補の二作品いずれもが大量殺人の話で、両方の被害者数を合計してみると百人を超えていました。こうなると二人ひとりの命が軽くなつて、もはや殺人の理由や動機などはどうでもよくなつてしまいます。たとえフィクションの世界だとしても、どうしても抵抗を感じてしまいます。やはり「人間信頼」の気持ちで作品の中に現れてしまうのは、私の個性だと思つて割り切っています。これは子供の頃から親しんできた漫画や海外の文学、そして映画といったものの影響が大きいのだと思います。

私の少年時代

私は昭和二十三年生まれですので、ちょうど戦後若い漫画家たちが一齐に活躍した頃に少年時代を過ごしました。また少年少女向けの読み物が少なかった当時、特に手塚治虫さんの非常に豊かな物語性をもった漫画から、物語のおもしろさというものを学びました。つまり手塚さんの影響を受けて、幼い私は物語を作りはじめたとも言えるわけです。三歳ぐらいの頃からただお絵かきをするのではなく、二応

ストーリーのある漫画のようなものを白いノートに描くことに熱中していたようです。私は福岡の中洲の生まれで七歳のときに家族で東京に移るまで福岡で過ごしましたが、その頃には描きためた漫画のノートを積み上げると天井まで届くほどになっていました。結局、上京するときに持って行けないので全部庭で燃やしてしまいました。それは今でも後悔しています。

小学校の中学年ぐらいになると、活字の方に興味を移し始めました。ともかく私は本当に運動が苦手で、かといって勉強がよくできるわけでもなかったため、学校でもとても苦労しました。私がお子に対して唯一我慢できるのは、難しい本が読めるということくらいだったわけです。わざと見栄を張つて小学校四年生の時にゲーテの「ヘルマンとドロテア」を読んだのがはじまりで、五年生でスタンダールの「赤と黒」なども読みました。周囲の子供たちはまだ童話を読んでいたような年頃です。人妻と不倫の話など当時の私にも理解できていなかっただけですが、わかったような気持ちになつて読むことで一人優越感に浸つていたのだと思います。

本当の意味での文学との出会いは、中学に進んでから読んだヘルマン・ヘッセの作品でした。青春の悩みや苦しみ、挫折が正直に語られていて、親しみを感じました。「車輪の下」は受験勉強に押しつぶされる少年の話ですから、現代の子どもたちにも共感しやすく今でもよく読まれているのだと思います。こうしてドイツやフランスの文学を通じて、私は海外のイメージをふくらませたり、ヨーロッパの文化に憧れたりするようになりました。

一方で、父親が映画関係の仕事をしていたこともあり、幼い頃から映画というものが身近

な環境で育ちました。表現としての映画に関心を持ったのは中学生の時です。特に古いフランス映画がとても好きで、名画座や名作上映会などでたくさん観ました。それを通じて私は、文章として書かれたものと映像的な表現とを、どのように結びつけるかを学んだ気がします。ですから、のちに小説を書くようになって、文章を書いたり読んだりするときに頭の中に浮かぶ光景は、昔のフランス映画のようにモノクロで色はついていない映像でした。

中学二年生の頃、私は「シャーロック・ホームズ」と出会いました。それまで難しい文学を無理して読んでいた私は、エンターテインメントとしての文学にはじめてふれ、文学にもこんなにおもしろいものがあると知ったのです。この頃まで漫画を描きつづけていましたが、ちょうど自分には絵の才能や技術がないことに気付いた時期でした。読者を楽しませる小説と出会った私は、特別な才能がなくてもこういうものなら少し頑張れば書けるかもしれないと感じ、中学三年生ぐらいから小説を書き始めました。

高校に進んでからは中世ヨーロッパの騎士の物語を書いたりしていましたが、内容はといえば戦闘シーンなどはまったくなく、主人公の騎士が王様のお妃と不倫をする話でした。私に通っていたのは中学・高校と男子校で、その六年間は女性と接する機会などなかったため、本当に想像だけで許されぬ恋のお話を書いていたわけです。その頃はまた、アーサー王伝説の中に騎士ランスロットが王妃と愛し合う話があるのを知りませんでした。が、やはりそれまでに私が親しんできた海外の文学や映画といったものの影響から、自然とそういう物語を考えただけだと思います。

高校の成績は悪かったのですが、なんとか無事卒業した私は、経済的な事情で大学には進学せず十八歳で就職しました。私にとって三十歳までの十二年間のサラリーマン生活は、人生に大きな意味を持ったと思います。学生のあいだはどうしても狭い世界で限られた人間関係しか持てませんが、会社という組織に入るといえる人々がいて、様々な世代や考え方の人たちと接する機会が増えます。会社勤めをしながら小説を書いていましたが、ただ好きだから続けていただけで、作家になろうなどとは思っていませんでした。しかし仕事もだんだん忙しくなってきた、二十五歳で結婚してその後子どもも生まれたので、小説を書く時間もなかなか取れなくなっていました。

小説を書くのもやはり習慣で、度まったく書かなくなるとまた書き出すときにエネルギーが必要になります。このままだと書けなくなると思った私は、はじめて何かに作品を応募しようと考えました。そうすれば締め切りがある、それを目指して頑張つて書くことを自らに課すことができると思ったのです。それまでにたくさん小説を書いていましたが、実は人に読ませたことは全くありませんでした。ですから入選して作家になろうとかではなくて、ただ書くのをやめたくないという理由から選択でした。

私が最初に応募したのは、雑誌でオリジナルの脚本を募集していた「非情のライセンス」という刑事もののテレビドラマのシナリオでした。私はミステリーをたくさん読んでいたし、シナリオならセリフさえ書けばいいのだからと考えたのです。本屋でシナリオの書き方の本を立ち読みして得たような、付け焼刃の知識で書いて応募しましたが、これがなんと入選してしまい、ちゃんとテレビ化されました。当時の月給を上回る



脚本料十五万円をもらったのも本当にうれしかったのですが、このとき私ははじめて、自分の書いたものを人が読んで面白いと思ってくれることに気が付きました。これをきっかけに、小説もあちこちに応募するようになりました。

その中の一つ「幽霊列車」でオール讀物の新人賞を受賞したわけですが、その際に編集者から開口一番言われたのは、会社を辞めないでということでした。新人賞をもらったくらいでは食べられないと言われ、もちろん私自身も会社勤めは続けるつもりでしたが、たしかにその後しばらくは作品を書いてもなかなか掲載されませんでした。それから二年ほど経ち三十歳になった年の春、「三毛猫ホームズの推理」がカッパノベルスから出版され、それが意外なほど売れました。当時カッパノベルスといえば、松本清張さんをはじめとする社会派ミステリーの牙城のような出版社だったわけです。編集部の方もかなり勇気のある決断だったと思います。結果として女性の読者にもたくさん読まれるようにな

りました。この辺りからミステリーのイメージそのものが変わってきたという風に言われますが、私にとってもプロになる大きなステップになりました。

それまでは、一生サラリーマンとして生活費を稼ぎながら、その傍らで時々自分の書いたものが活字になって載ればいいくらいに思っていました。が「三毛猫ホームズ」以降は様々な小説雑誌から執筆依頼が来るようになりました。そうなるのと二種の定期収入になるわけで、そこではじめて職業作家としてやっていくことを考えたのです。それでもやはり毎月の給料やボーナスといった収入をすべて諦めるわけですので、会社勤めを辞めて作家専業になるのはかなりの覚悟が必要でした。今振り返ってみても、作家専業になつてすぐに「セーラー服と機関銃」を書いてそれが映画になるなど、私は本当に運に恵まれていたのだと思います。

作家として若い世代に伝えたいこと

私の小説はだいたいハッピーエンドで終わることが多いのですが、それは言い換えると、理由もなく人を殺すことが珍しくなくなってしまう今の時代を、小説の中に描写しきれていないのかもしれない。しかし私は、あくまで創作の世界の中では、人間はそう簡単に人を殺さないうちということや、人ひとりの命を奪うことはどんなに大変なことかを、読者に伝えていければと思っています。私がエンターテインメントの書き手として大切にしているのは、読み終わったときの後味の良さです。私が影響を受けたアガサ・クリステイの「そして誰もいなくなった」も登場人物が最後には全員死んでしまうような話ですが、そこにはきちんとした理屈があつて、人間としての怒りや憎しみ、許しといった人間らしい感情が保たれているので、決して読後感には悪くありません。

松本清張さんの作品は、いまだにテレビドラマや映画になったり、読まれ続けたりしています。それはやはり普遍的な人間のドラマというもの描き出されているからで、決してその当時しか通用しないものではなく、時代をこえて私たちの心を打つからだと思っています。

私もこの年齢になると、世の中のためにという大げさですが、次の世代に何を残し伝えていくかというのを考えます。これだけ世の中で人間同士の関係や、人間の感情というもの希薄になってしまったのは、いまの若い人たちが小説を読まなくなったことと無縁ではないと思います。人は小説を読むことによって、主人公になりきって冒険をしたり、恋愛や失恋したり、喜んだり悲しんだりすること、そして相手の立場に立つことを覚えます。つまり小説家は、若い人たちの想像力を育てる役割も担っているわけですから、彼らが夢中になって読めるような小説を書いてこなかったという点では、私たち現代の小説家の怠慢と言えるかもしれません。

人間の楽しみには二種類あると思います。一つは感覚的な楽しみであつて、それをやつていればもう単純におもしろいというものです。もう一つは知る楽しみであり、ものごとの因果関係や歴史を学ぶことで、世の中の様々な事象が理解できるようなものになるという喜びです。この二つを若いうちに身につけなければ、大人になって社会で生きていくことは困難だと思います。

今、決してハッピーではない時代が私たちの目の前にはありますが、それに対して抵抗できるのも若い世代の人たちです。彼らにはぜひ、歴史の中で何があったのかを正しく学んでいただきたいと思っています。その際によい参考や手本となるのは、やはり歴史や社会、そして人間をきちんと書いてきた、多くの作家たちの作品なのだと思います。

開館20年の軌跡展

（終わりなき探求）



松本清張記念館は平成30年8月に開館20周年を迎えます。これを記念して「開館20年の軌跡」と題した展示を行います。開館前後から現在にいたるまでのあゆみや出来事をたどり、この20年をふり返ります。

I 20年のあゆみ ～プロログ、開館・創設、発展、充実、未来へ～
開館前後から現在までの主な出来事を年表で展示。

II これまでの企画展 ～清張を多面的に照射する～
過去の企画展ポスターをジャンル別に分け一堂に展示。

III 研究奨励事業 ～清張研究の未来を拓く～
歴代入選者・研究成果の紹介

IV 研究誌の刊行 ～「清張研究」という文学の新たな地層～
各号特集テーマや執筆者・内容の紹介

V 研究会の活動 ～清張研究の拠点として～
講演・発表など活動状況

VI 友の会の活動 ～松本清張を楽しむ！～
多岐にわたる友の会事業の活動状況

VII 未来に向けたメッセージ ～清張への思い・今後の記念館に期待するもの～
著名人(作家・俳優等)より

会場 展示期間

松本清張記念館 地階企画展示室
地階のみ観覧無料、常設展示は有料です。

平成30年2月1日(木) —
3月31日(土)

● 清張作品絵選挙コーナー

会場内にて、お好きな清張作品に投票できます

● オリジナル映像コーナー

記念館オリジナル映像を上映いたします



あふれる想いを… 4

今回は、記念館建設当時に展示空間の企画・設計・施工を担当して、この素敵な空間を創ってくださった、公益財団法人吉田秀雄記念事業財団 事務局長の橋本研一郎さんに、当時のエピソードと、これからの記念館について綴っていただきました。



吉田秀雄記念事業財団 事務局長
橋本 研一郎 氏

私は記念館建設当時、展示空間の企画・設計・施工を担当いたしました。

「松本清張の全仕事と作品世界をいかに伝えるか」、藤井館長(現名誉館長)と北九州市の方々を中心に、企画から完成まで多くのプロフェッショナルの方々のご熱意と力が結集し完成したことを思い出します。その中からいくつかのエピソードをご紹介します。

■ 館は「蔵とそれを囲む回廊」のイメージ

建築家・故宮本忠長氏の設計思想「美・用・強」の建築空間と展示空間がダイナミックに融合した記念館になったのではないかと思います。書斎・書庫を大切に収蔵する展示室2「思索と創作の城」の強固な蔵を、「松本清張とその時代」の大年表を収める展示室1が回廊のように取り囲む空間構成。その内部空間は勿論のこと、小倉城址の一角に溶け込む素晴らしい風景を形作っていると思います。完全再現した応接室・書斎・書庫を故松本ナヲ夫人が初めてご覧になった時、「自宅にいるかのように錯覚します。」と仰ったことがとても印象的でした。

■ 清張氏の世界を一つの色で表すとしたら?

清張氏の多くの作品タイトルにあるように、やはり『黒』ではないかと思います。展示空間デザインも黒を基調色にして、「推理劇場『火の路』へ(開館当時)」や年表に、清張氏の強靱な精神力と創作への情熱を象徴する赤をアクセントに使いました。

■ 「思索と創作の城」に微かに流れる音楽

書斎・書庫が浮かび上がる「思索と創作の城」の空間にどんな環境音楽を流すか? ジャズが大好きな北九州市の担当者・熊笹御堂さんと私は、フィ

ルムノワールのフランス映画をイメージしながら、作曲家・谷川賢作さんに依頼し、素晴らしい音楽を作曲・演奏してもらいました。「思索と創作の城」の黒く深い闇に溶け込むような音楽は、清張氏の作品世界を音で表現できたのではないかと思います。

■ 書庫の蔵書データベースづくり

書庫の約3万冊の蔵書データベースをつくるために、一人の女性司書の方が迷路のような書庫に数か月間籠りコソコソと調べ上げデータ入力し、その結果データベースが完成しました。本当に大変な作業だったと思います。書架に並ぶ順番、置き方など浜田山のご自宅と全く同じ状態にできたのもそのお陰です。

■ これからの記念館

来年で20周年を迎える記念館は、建設当時の多くの方々のご情熱が完成後もさらに特別企画展や「松本清張研究会」などの充実した活動・運営に引き継がれ、常にアクティブに情報発信し続けてきた文化施設であったと思います。

様々なメディアで情報が飛び交う今の時代、「普遍的なテーマによって人間を描き、歴史・社会の闇に迫ろうと試みた(記念館ホームページより)」氏の視点と姿勢は益々重要性を増しています。これからもこのことをメッセージとして発信し、活動し続ける館としてさらに進化していくことを願っております。

清張オマージュ作品を教えてください!

松本清張記念館は平成30年に開館20周年を迎えます。これを記念して当館では「清張オマージュ展」(仮)を開催する予定です。松本清張や、清張作品への愛を、文章や絵、漫画などの作品で表現したものを、できるだけ多くご紹介したいと思っています。ご存知の方は、是非とも情報をお寄せください。**お待ちしております!!**

例えば……

この前読んだ小説に清張が出てきたよ!

清張の本が出てくる漫画があった!

著名人が、好きな作家に清張の名前を挙げていた



オマージュ: homage(フランス語)とは ①尊敬、敬意。②賛辞。献辞『広辞苑』より

応募・お問い合わせ先

〒803-0813 北九州市小倉北区城内2-3
松本清張記念館 オマージュ係

TEL 093-582-2761 FAX 093-562-2303
E-mail shi-seichou@city.kitakyushu.lg.jp

※当館の公式ウェブサイト、トップページから送信できます。

『「点と線」関連資料』

二〇一七年の今年は、「点と線」の連載(九五七)からちょうど六〇年前という節目の年だった。六〇年前ともなると、小説の「アライヤトリック」に使われたものが、今では随分変わってしまった。

有名な「東京駅(4分間)のトリック」も、夜行の博多行特急「あさかぜ」があればこそ、成立したといえよう。そのほか、「列車食堂」、「青函連絡船」なども、現代では列車の高速化や青函トンネルの開通により、その姿を消している。

「点と線」が人口に膾炙し、ベストセラーとなったのは、実は光文社から刊行された単行本以降だという。また同社のカッパノベルズ版は、清張作品のベストセラーを数多く生んでいる。

その上で、敢えて注目すべきは、「点と線」が雑誌「旅」に連載されたことである。松本常彦氏は「旅」と「点と線」(注1)で、「旅」の読者は、小説の読者である前に、まず雑誌の読者である。その楽しみは「旅」の寄稿家だった清張も熟知していたと指摘する。また、交通公社による「周遊券」の復活に注目し「小説の大枠となる舞台とトリック(交通)の選択が、周遊券構想と呼応するのは偶然だろうか」とも。

本論は、「点と線」の掲載誌である「旅」と作品が呼応し、連載中にも影響を受けながら作品が展開することを論証しており大変興味深い。たとえば「旅」のプランニングは「旅」誌上にも種々のかたちで掲載されて

いた。(略)「旅のプラン」は図式化すれば「点と線」になる。「点と線」の図とコースタイムの設定・実行は、掲載誌では旅のプランニングを読む作業をもたらし、小説では刑事と犯人の双方が繰り広げるアライヤをめぐるシミュレーションを読む作業になる」と、タイトルへの連想にも光を当てている。清張の創作ノート(松本清張短篇集)に掲載を見ても、確かに図式化されたコースタイムの「点と線」が認められる。

昔と今、交通事情は変わっても、旅に誘われる私たちの心は変わらない。現代人も新たな交通手段やツールを使って、それぞれの「点と線」を描いているのだろうか。

(学芸員 柳原暁子)

(注1)松本常彦(九州大学大学院教授)「旅」と「点と線」(「松本清張研究」第一八号、二〇一七年)



「時間の習俗」① 和布刈神事

清張の小説には、同じ登場人物のシリーズ物はほとんどないが、唯一の例外が「点と線」と、その姉妹作にあたるこの「時間の習俗」である。

「点と線」で活躍した警視庁の三原警部補と福岡署のベテラン鳥飼刑事の名コンビが再び登場するこの小説は、「点と線」同様、雑誌「旅」に昭和三十六年〜三十七年に連載された。

この小説の冒頭に出てくるのが、北九州市門司区の風景であり、和布刈神事についてである。

バスは三十分かかって狭い海岸通りを走り、海峡へ少し突き出た岬で客を降ろした。岬は関門海峡の九州側の突端である。(中略)バスは鳥居の傍で止まった。客はぞろぞろと鳥居をくぐってゆく。境内では数カ所に篝火が焚かれていた。寒い晩のことだし、篝火の周囲には群衆がいくつもの輪を描いていた。境内のすぐ前は、暗い海だった。対岸に灯があるが、これは下関側の壇ノ浦だった。

(文藝春秋「松本清張全集」1「時間の習俗」より)



現在とほぼ変わらない風景の描写、変わらない神事の様子が書かれている。和布刈神事とは、旧正月の早朝に引潮の海で若布を刈り取って神前に供える儀式である。

和布刈神事は、神社創建以来続いた神事で、神功皇后が安曇磯良を海中に遣わし、潮涸珠・潮満珠の法を授けた遺風とされている。毎年冬至の日に和布(わかめ)繁茂の祈念祭をもつて始まり旧暦十二月日には松明を作り奉仕の神職は一週間前から別火に入り潔斎を行う、旧暦一月一日午前三時頃神職三人は衣冠を正し鎌と桶を持ち松明で社前の石段を照らして下り退潮を待つ厳寒の海に入り和布を刈る、これを特殊神饌(福増・歯固・力の飯等の熟饌と共に神前に供えて祭典を行い、明け方近くに終わり直会であての行事を終る。

(和布刈神社リーフレットより抜粋)

和布刈神社に古くから伝えられる神事ということで、現在でもこの小説に出てくる手順とおりの儀式が行われ、真夜中にもかかわらず全国から大勢の見物客がやってくる。

神事の日には、見物客であふれかえる境内も、通常は森閑として波の音だけが響いている。鳥居をくぐり境内に入ると、一角に海へ向かって鳥居がもう一基建っている。鳥居の向こうは石段が海へと続いており、和布刈神事の折にはここから神職が降りていく。流れが速いことで知られる「早瀬ノ瀬戸」ではあるが、時にゆるやかに、関門橋の下を船がのんびりと行き交い、悠

久の時を感じさせる。雑事を忘れるこの場所、清張もこの風景をのんびりと眺めたのだろうか、と遠き日の先人に思いを馳せた。

来年、平成三十年の和布刈神事は、二月十六日の早朝二時三十分からとりおこなわれる。

(檜垣一美)

イベントのお知らせ

松本清張原作ドラマ上映会開催

過去にNHK北九州放送局より寄贈を受けた、NHK土曜ドラマ・清張原作シリーズ（昭和50年代に制作・放送）3作品の、上映会を1月に行います。

日程	平成30年1月12日(金)、13日(土)、14日(日)、19日(金)、20日(土)、21日(日)
上映	1日2作品(10時30分~/14時00分~)上映
場所	松本清張記念館 地階 企画展示室・映像ホール
入場料	無料(事前申込、受付不要) ※常設展示を観覧する場合は別途入館料が必要となります。
上映作品	「依頼人」「天城越え」「火の記憶」※どの作品にも松本清張が特別出演しています。

◎上映スケジュールは、記念館ホームページにてご確認ください。



友の会 活動報告

● 平成29年度年次総会・懇親会

平成29年8月5日(土) 参加者31名
総会：北九州市男女共同参画センター・ムーブ 5階

赤川次郎さんによる開館19周年記念講演会の後、平成29年度友の会年次総会を開催しました。前年度の事業報告及び決算、役員選任、新年度の事業計画及び予算等の審議が行われ、拍手をもって承認されました。懇親会は、総会終了後に会場を小倉リーセントホテルに移して行いました。研究奨励事業山田審査委員長にもご参加いただき、和やかな懇親会となりました。



● 清張サロン 記念館 企画展示室

第1回 平成29年9月22日(金) 14時~16時 参加者36名
●講師：下澤聡(記念館・企画係主任)
●テーマ：「清張と鉄道-時代を見つめて★小倉発1万3500^キ」

平成29年度の第1回清張サロンは、記念館の下澤主任を講師として、開催中の特別企画展「清張と鉄道-時代を見つめて★小倉発1万3500^キ」をテーマに開催しました。展示の見どころや開催準備の裏話などについて、分かりやすく興味を引く説明があった後、展示を観ながらの解説を行いました。



● 文学散歩

テーマ：「紅葉の耶馬溪、安心院、天領日田を訪ねて」

平成29年11月14日(火) 参加者40名
訪問先：妻垣神社、松本清張文学碑、耶馬溪、旧豊後森機関車庫、咸宜園

大分県の耶馬溪・安心院は、清張が作家になる前からよく訪れた場所であり、作品の中でも登場人物が足跡を残しています。妻垣神社では、同神社総代長で、清張と安心院についての本も出版された矢野省三さんに、清張が安心院を訪れた際のエピソードなどを語っていただきました。また、耶馬溪では、小説「青春の彷徨」にも登場する旅館の「鹿鳴館」前の「一目八景展望台」から紅葉の景色を堪能しました。旧豊後森機関車庫は、国指定登録有形文化財でもある九州の代表的な鉄道遺構です。豊後森は、交通の要衝として、清張作品



の中でも降車・乗換えの場所として登場しています。最後の訪問地である日田市は、時間の関係で残念ながら咸宜園の見学のみとなりましたが、創設者である広瀬淡窓の理念や輩出した人物などについての解説を受け、江戸時代に幕府直轄地・「天領」として栄えた日田の歴史の一端に触れることができました。今回も盛り沢山の内容で、参加者の皆様から「とても良かった」「清張の思いに触れることができた」「訪れたい場所に行けてよかった」といった声をいただきました。

● 友の会会員 更新のお知らせと新規会員募集 ●

松本清張記念館友の会は8月1日~翌7月31日を1年度として、文学散歩や清張サロン、講演会、生誕祭、「友の会だより」の発行、記念館に関する情報提供など多彩な事業を展開しています。年会費は3,000円です。皆様のご入会を心よりお待ちしております。

友の会入会のお申込は、
松本清張記念館友の会事務局まで
TEL.093-582-2761

松本清張記念館

第19回

松本清張研究奨励事業
入選企画決定

「松本清張研究奨励事業」は19回目を迎えました。選考委員会による厳正な審査の結果、次の研究企画が入選しました。

歴史家が残した手書きの資料から、歴史家同士の関係や歴史学の展開について解明しようとする研究であり、その方法は清張の取り組みと重なり合うものです。斬新でユニークな研究として成果が期待されます。

企画名 自筆原稿・日記・書簡類を素材とした
日本近現代史学史の研究

入選者 坂口 太郎
(高野山大学助教)



本の紹介

第17回松本清張研究奨励事業の入賞者
赤塚隆二さんの研究成果が本になりました。

「清張鉄道1万3500キロ」株式会社文藝春秋
定価(本体1500円+税)

書店で見かけたらぜひ
手にとってみてください。記
念館のミュージアムショップ
でも販売しております。

作者の赤塚さんは、
「この本がきっかけで清張
作品に親しむようになる人
がいればおもしろいです
ね」と笑顔でおっしゃって
いました。



編集・発行

松本清張記念館

〒803-0813
北九州市小倉北区城内2番3号
TEL 093(582)2761
FAX 093(562)2303
http://www.kid.ne.jp/seicho
制作 (株)ハーティブレーン



イラスト:山藤 章二

- 開館時間 午前9:30~午後6:00(入館は午後5:30まで)
- 休館日 年末(12月29日~12月31日)
- 観覧料 一般/500円(400円) 中・高生/300円(240円)
小学生/200円(160円) ()は30人以上の団体
- アクセス JR: 小倉駅から徒歩15分 西小倉駅から徒歩5分
小倉駅からはバスをご利用いただくと便利です(小倉城・松本清張記念館前下車)
車: 北九州市高速、大手町ランプより5分

第20回 松本清張研究
奨励事業募集

募集要項

- 対象** ① 松本清張の作品や人物を研究する活動
② 松本清張の精神を継承する創造的かつ斬新な活動(調査、研究等)
※上記①②の活動で、これから行おうとするもの。
ジャンル、年齢・性別・国籍は問いません。ただし、未発表に限ります。個人又は団体可也。
- 内容** 入選者(団体)に120万円を上限とする研究奨励金を支給します。
- 応募方法** 今後取り組みたい調査・研究テーマ等の内容が具体的に分かる企画書、予算書、参考資料(様式は自由、ただし日本語)を、平成30年3月31日までに応募してください。

※詳しくは、ホームページをご覧ください
になるか、記念館までお問い合わせください。



●編集後記● 「清張通り」の街路樹も赤や黄色に紅葉し、秋が深くなってきました。

今年は一か月締め切りを早めた中高生の読書感想文コンクールでしたが、昨年以上にたくさんの応募がありました。思わず笑みがこぼれるような内容のものから、大人顔負けの読解力のもので、若い感性があふれた作品に新たな時代の息吹を感じました。

平成30年は開館20周年の年です。

まずは1月のドラマ上映会と2月からの「開館20年の軌跡展」で、皆様のご来館をお待ちしております。

(K.H)

